

<p><b>学校教育目標</b></p> <p>◎よく考えずんでやりぬく子 ・みんな仲よく助け合う子 ・明るく強い元気な子</p>	<p><b>育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動</b></p>
<p><b>目指す学校像(ビジョン)</b></p> <p>【目指す学校像】 「笑顔あふれる学校」子供たちが安心・安全で楽しく学校に通い、人とのかかわりを大切にして自分を尊重して学び合う小</p> <p>【目指す児童・生徒像】 よく考えずんでやりぬく子 ・みんな仲よく助け合う子 ・明るく強い元気な子</p> <p>【目指す教師像】 深い児童理解と高い授業力をもつ教師 児童や保護者とコミュニケーションを図り信頼関係を築ける教師 明るく謙虚で責任感をもつ教師 互いに高め合い協働できる教師 教育公務員としての自覚と責任、誇りをもつ教師</p>	<p>本校の教育目標のもと、知・徳・体の調和のとれた児童の育成をめざす。中でも重点目標である「よく考え進んでやりぬく子」の育成をめざし、授業のねらいが明確であり、「わかる・できる」を実感できる授業を展開する。また、特別支援学級(自閉症・情緒障害学級)設置校として、通常学級との連携を密にした特別支援教育を展開する。特に「特別支援教育校内委員会の充実」「ユニバーサルデザイン授業の推進」「インクルーシブ教育の推進」に重点的に取り組むことで、個に応じた指導を充実させる学習環境を整え、きめ細やかな指導の充実を図る。</p>

**前年度までの学校経営上の成果と課題**

「成果」めあてを明確化し、見直しをもって一単位時間に取り組ませたことによる、学が意欲や基礎学力の向上。地域連携による子供たちへの授業・生活サポートの充実。

「課題」読む力の向上を目指し、「学が楽しさ・自分の伸びを実感できる」授業を展開する。(指導法、発問の工夫、対話の場の設定など)地域連携の輪の一層の充実。

柱	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	次年度以降の改善方策	
		評価	課題及び次年度以降の改善方策(案)	学校関係者による「自己評価」についての評価	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策	
確かな学力の向上	全学級で「教える時間」と「考えさせる時間」を意図的・計画的に設定した教えて考えさせる授業実践に取り組む。	3	3	「児童に考えさせる指導をしている」と回答した保護者は82%、教職員は86%であった。しかし児童で「じっくりと考えることが好き」と回答した割合は65%であった。児童は「何のために考えているのか」「考えた結果どのようなことを身に付けたのか」ということを実感できていない可能性がある。考える学習活動に必然性をもたせ、解決できた喜びを実感できる授業展開を進めていく。	自分で考えることができる児童の割合が増えたことは素晴らしい。このことを継続してほしい。考えるという過程から結果が見えることでの喜びを実感できるようにすることは良いことだと思う。考えることで、様々な行動にもつながっていくと思う。授業以外の時間でも、考えて解決できることはあると思うので、体験を積み重ねて実感できるようにしてほしい。	自分で考えることができる児童の割合をさらに増やすために、各授業において児童が「考えたい」という気持ちになるような課題設定を考慮する。そのために、全教員が十分な教材研究や、児童の実態把握を行う。本校では、初任者4名をはじめとして多くの若手教員が在籍しているので、主幹教諭や主任教諭が核となり、日々(教員への)指導・助言を行う。また、管理職は、その監督や、授業観察などを通して、組織的課題解決の実現をめざす。
	特に読む力の向上をめざし、児童が興味・関心をもてるような、導入の工夫や活動形態の工夫を行う。	3	3	保護者の91%が「読む力」の向上に関する取組について肯定的に捉えている。しかし「読む力がついた」と回答した児童は77%と、児童の実態にはつながらているとはいえない。児童が興味・関心をもてるような導入の工夫や活動形態の工夫を行うとともに、児童に「読む力がついた」とことを実感させられるような取組を取り入れた授業を展開していく。	読む力の向上は、考える力の向上につながると思う。また、多種多様な事象に対して興味・関心がないと、関連する様々な力は育たないと思うので、今後も継続的に指導していってほしい。	読む力をさらに向上させるために、朝読書の充実や、新聞の活用を充実させる。「本校の特色」欄にも記述したように、学校だけの取組だけではなく、外部との連携を加えた両輪での指導で、積極的に読む力の向上に努める。また、家庭でも読書に親しめるよう、各種お便りやホームページなどを通して保護者への啓発を行う。
豊かな心の育成	道徳科を中心として互いに認め合い、思いやる関係を育て、道徳的な心情を喚起し、実践できるようにする。	3	4	「学校はいじめ、暴力などを含めた子供の間違った行動を見逃さず適切に指導している」と回答した保護者は79%、「八のきまり」を守って生活している」と回答した児童は87%であった。道徳実践力を高める指導を継続して行くと共に、いじめや暴力の根絶を含めた人権教育の充実を図っていく。	いじめの根絶は難しいが、一人でも多くの子が理解できるよう、今後も粘り強く指導していってほしい。トラブルにはその都度丁寧に対応していくことで、子供たちもしっかりと話を聞いているが、身につくまでには時間がかかる。しかし、できている子(いじめはよくない)と理解できている子も多く見られる。高学年から低学年へよい声かけも見られる。	「根絶は難しい」という意見があるが、学校としては「根絶」を目指して、全児童が楽しく生活できるような努める。人権教育について、道徳科を中心に普遍的な取組を行うとともに、場面に応じて、人権課題に直面させる「個別的な取組」と意識した指導を、発達段階に応じて取り組む。
	「わからく・温かく・毅然」とテーマに言語環境を整備し、自主的な挨拶を励行する。支持的風土の醸成を基に、聞き合う、話し合う関係づくりに取り組む。	3	3	保護者、教職員ともに78%が、この項目についてプラスの評価をしている。また88%の児童が「安心して学校生活を送れている」と回答した。しかし、児童同士のトラブルや相手する言動は無くなっている。児童のよいところはほめるとともに、よくない行動については学年学級関係なくその場で指導することを徹底していく。	よくないことを指導するだけではなく、よいところをほめていくことは、先生との信頼関係にもつながると思う。また、相談しやすい環境にもつながっていくと思う。素晴らしいことだと思います。毅然とした態度で指導することも徹底してほしい。	東京都教育施策大綱に「誰一人取り残さない」とある。「安心して学校生活を送っている」項目に12%の児童が否定的な回答をしていることを重く受け止める。まずは、そう回答している児童をリサーチし、話を聴き、その子に応じた支援を組織的に行う。同時に、周りの子供たちを育てる指導・助言を行う。
健やかな体の育成	外遊び・体育授業・芝生を活用した実践など、体力向上の取組を継続して行う。	4	4	「学校は体力向上を目指した取組を行っている」と回答した保護者は78%、「運動したり体を動かしたりすることが増えた」と回答した児童は80%であった。夏はWBGT指数上昇に伴い、屋外での活動に制約が出ている。このような状況下でも児童の体力を向上できるよう体力調査の結果を分析し、取組について考え、実践していく。	多くの児童が、体育の授業や外遊びなどを楽しんでいるように思う。授業の内容について、運動が苦手な子にとっても、安全で楽しい内容であると思います。一方、体力向上や基本的な運動能力について、先を見るところに不安を感じる。現状、中学進学後の運動能力について、他校との差があるように感じる。	運動を楽しく行うためには、場所の確保が必要である。雨天時の体育館活用を工夫する。また、「東京都プロジェクト」や各種出前授業などを積極的に活用し、プロスポーツ選手から学ぶ機会を企画する。暑さなど、環境要因で実施が難しくれば、オンラインを活用するなどの工夫をする。水泳指導については、外部委託のメリットを最大限に生かす。
	「早寝・早起き・朝ご飯」、食育等の実践により体と心を充実させると共に、安全指導を充実させる。学校だより、保健だより等によって、保護者の啓発にも努める。	3	3	「学校は、食生活での好ましい習慣や基本的な知識を大切に取組(食育)を行っている」と回答した保護者は88%であった。給食試食会の申し込みの状況を見ても、保護者の給食についての関心が高い。しかし、「早寝早起き朝ご飯」ができている」と回答した児童は68%と高くない。普段から朝ご飯を食べずに登校している児童も一定数いる状況であるため、折に触れて「朝食の摂取」「バランスのよい食事の必要性」を伝え、児童や保護者の意識を高める。	給食は、バランスも味もよく、メニューも豊富で飽きずに楽しめると思う。栄養士さんが給食時に教室を回ったり、放送委員が栄養などをアピールしたり、廊下に掲示するなど、全体が興味・関心をもてるような工夫をしながら、子供だけではよくない保護者の周知もよいと思う。給食のメニュー決めについて、子供たちが参画できる取組みも素晴らしいので、今後も継続してほしい。	「早寝・早起き・朝ごはん」について、否定的な回答が32%もあることに注目し、それに関しての対策が重要であると考える。これに関して、学校で取組だけでは解決しない。様々な事情を抱える家庭があることは承知しているが、外部機関との連携をさらに強化する必要がある。また、学校運営協議会の情報は、地域教育におけるキーパーソンであるので、密に情報交換をしながら子供たちを育てていきたい。
特別支援教育の充実	特別支援委員会(校内委員会を含む)を月に一度以上開催し、配慮が必要な児童の実態に合わせた指導改善を目指す。	4	4	「学校は、子供のことに相談したい時は、相談に乗ってくれる」と回答した保護者は87%。「困ったことがあったとき、先生やスクールカウンセラーの先生が相談に乗ってくれる」と回答した児童は86%であった。個人面談期間以外に児童についての相談を申し込んでも保護者も増えてきている。特別支援校内委員会は、定期的に実施している(11月末時点で21回)。次年度も、保護者の相談には随時対応し、どの教員も個々に応じて支援を行えるように研修を重ねていく。	児童は、相談に乗ってくれることは理解しているが「自分の考えすぎではないか」「こんなことで相談してよいのか」と考えることがあるので、そのことを指導に生かしたほうがよいと思います。保護者向けに、支援級などとの説明を増やしたほうがよいのではないかと。	改善のキーワードは、「児童理解」と「啓発活動」であると考える。前者については、日々の行動観察と一緒に遊ぶなどのふれあいなどが有効である。そのためには、教員に心的・肉体的余裕が必要なので、働き方改革を含めた対策を行う。後者については、定期的に配付する相談窓口カードの紹介や、小さなことでも大丈夫だと確認できたことに意味があることを伝えたり、一人一人を大切にしていることを伝えたりしていく。命の通問を中心に、相談する大切さについて指導する。
	ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり及び環境づくりを推進し、通常の学級の教室内支援を充実させる。	4	4	「学校は、子供が安心して学習、生活できる環境を作っている」と回答した保護者は86%であった。どのような環境がユニバーサルデザインの視点に立った環境なのか保護者に知らせていく。通常学級内に在籍する支援を必要とする児童のために、教室内での支援を充実させ、全ての児童が安心して学校生活を送ることができるようにしていく。	教室内や廊下などに無駄が少なく、集中できる環境が整っているようで、今後も継続してほしい。どの学級も、楽しく学校生活を送るための掲示物などが、たまたただるだけではなく、見やすいように工夫されていて素晴らしい。	教室や廊下の環境について、委員の皆様から高評価をいただけていることを継続しつつ、さらによくするために、特に以下の2点を意識する。①児童の実態や発達段階に応じた環境づくり②ユニバーサルデザインやインクルーシブ教育の視点をさらに取り入れる。これらを全教員が実施できるよう、校内研修などを通して指導する。
本校の特色	学校運営協議会や学校支援本部の協力を得て、地域の人材や学習材等の資源を活用して、多様な体験の場を設けた授業を実施する。	3	3	「学校は、保護者・地域と連携して子供の教育にあたっている」と回答した保護者は91%であった。御殿山や台田の杜の散策、オオムラサキの観察、農家やJAと連携した地域の産業についての学習を継続して行うとともに、学校運営協議会、学校支援本部等の協力を得て、地域の学習材の開発や活用を積極的に進めていく。	地域学習には多くの保護者が協力してくださっていることもあり、子供たちが意欲的に活動している。発表の時も、とても楽しんでくれている様子が見られている。この調子で、清瀬のよさを知ることのできる経験を増やしてほしい。	地域の方々が、共に子供たちを育てようとする気持ちをもってくださっていることに感謝しながら、日々の教育活動に取り組みしていき、現在も十分協力してくださっているが、まだ埋もれている「人材」がいっぱいいると思うので、学校運営協議会と協働し、その方々も活用できるようにする。
	読書旬刊(年2回2週間)の設定、「スクールライブラリ」、および「市立図書館の学校宅配サービス」の積極的活用などを通して、「読書が好き」と答える児童を増やす。	2	3	「学校は本に親しみ指導を行っている」と回答した保護者は82%、「本を読むことが好き」と回答した児童は64%であった。スクールライブラリは、アカウント数が少ないため、5年生に重点的に使用させた。令和8年度は、市立図書館の宅配サービスなどを積極的に活用し、本に触れあう機会を多くもたせることで、「読書が好き」と答える児童の割合80%以上をめざす。	読み聞かせは聞けど、自分で読む児童は多くないと感じています。ポラリティアさんが作成したしおりが好きな程度でも本を借りた子もいます。読書を習慣化することは時間がかかりますが、定期的イベントがあると良いと思います。宅配サービスは便利だが、本が苦手な子は、そもそも選べるものが少ないと思う。雨天時やWBGTが高い日などは本に頼れないように促す。	「本の選び方・探し方・こんな本もあるんだ」という紹介の取組などを通して、読書好きな児童を増やせるよう、学校図書と連携する。また、学校図書館に埋もれている良書を紹介する機会を、図書委員会と連携しながら行う。スクールライブラリーの使用方法について定着させ、積極的に活用させる。読書から探究活動とつなげるよう指導する。